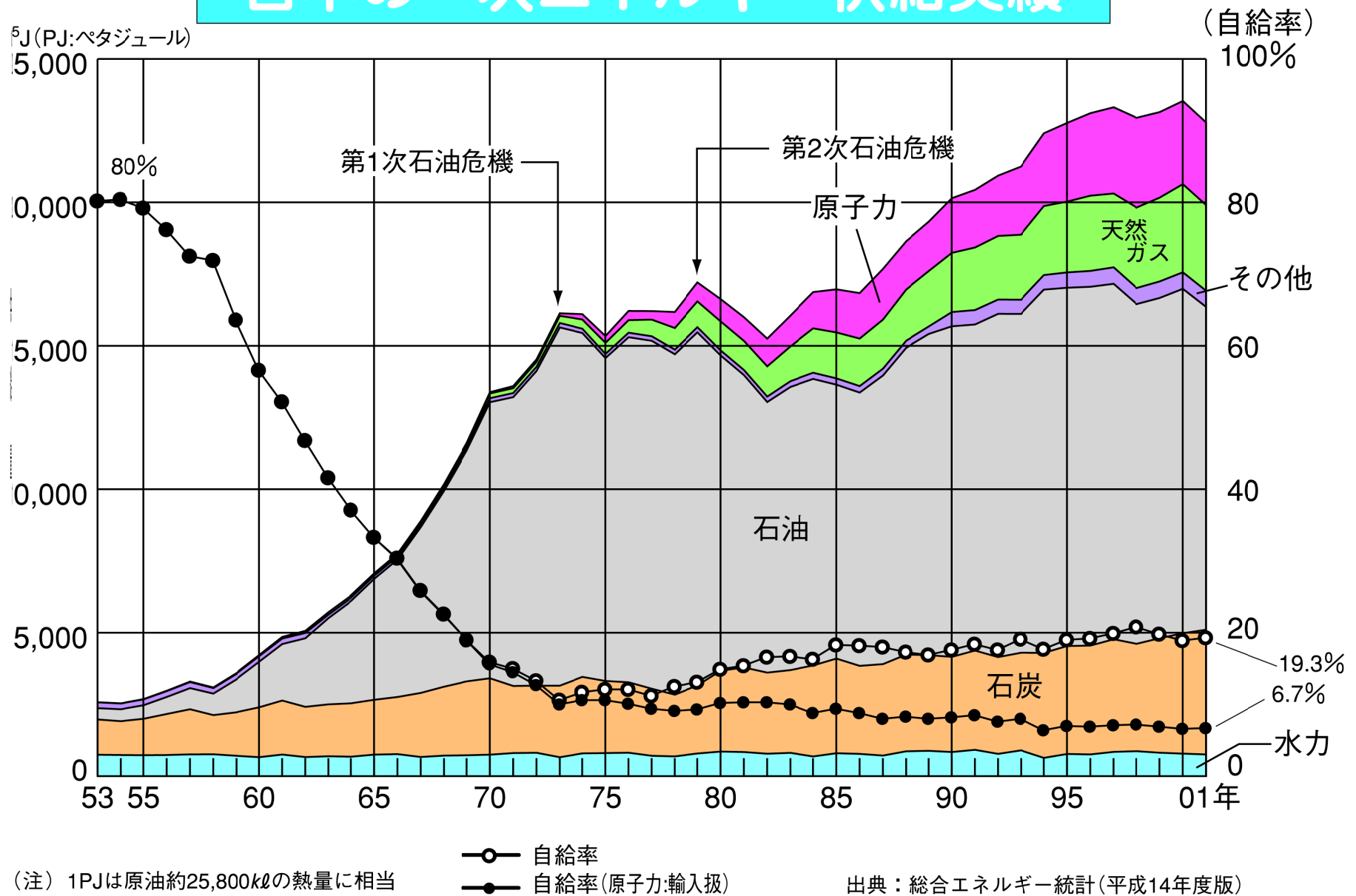


1。私の履歴書

- 馬齢71歳 職歴50年弱 本籍 福井県
- 昭和31年〔1956〕東電 原子力希望入社 第1号
- 翌年に日本原電発足。わが国初号の東海ガス炉の設計
- 昭和35年〔1960〕 東電に戻り 中東油の突出で火力の建設現場 以降30年間主に火力職場
- 平成8年(1996)日本原燃〔青森〕サイクル事業
- 平成13年から16年原力委員会委員 以降東電顧問
- キセル原子力屋 自称
- 黎明期明期の原子力5年。東海炉。吸い口の甘さ。
- 油到来(1960)高度成長期30年 火力畑。竹筒。
- 老後ここ10年は原子力へUターン ヤニの苦さ。

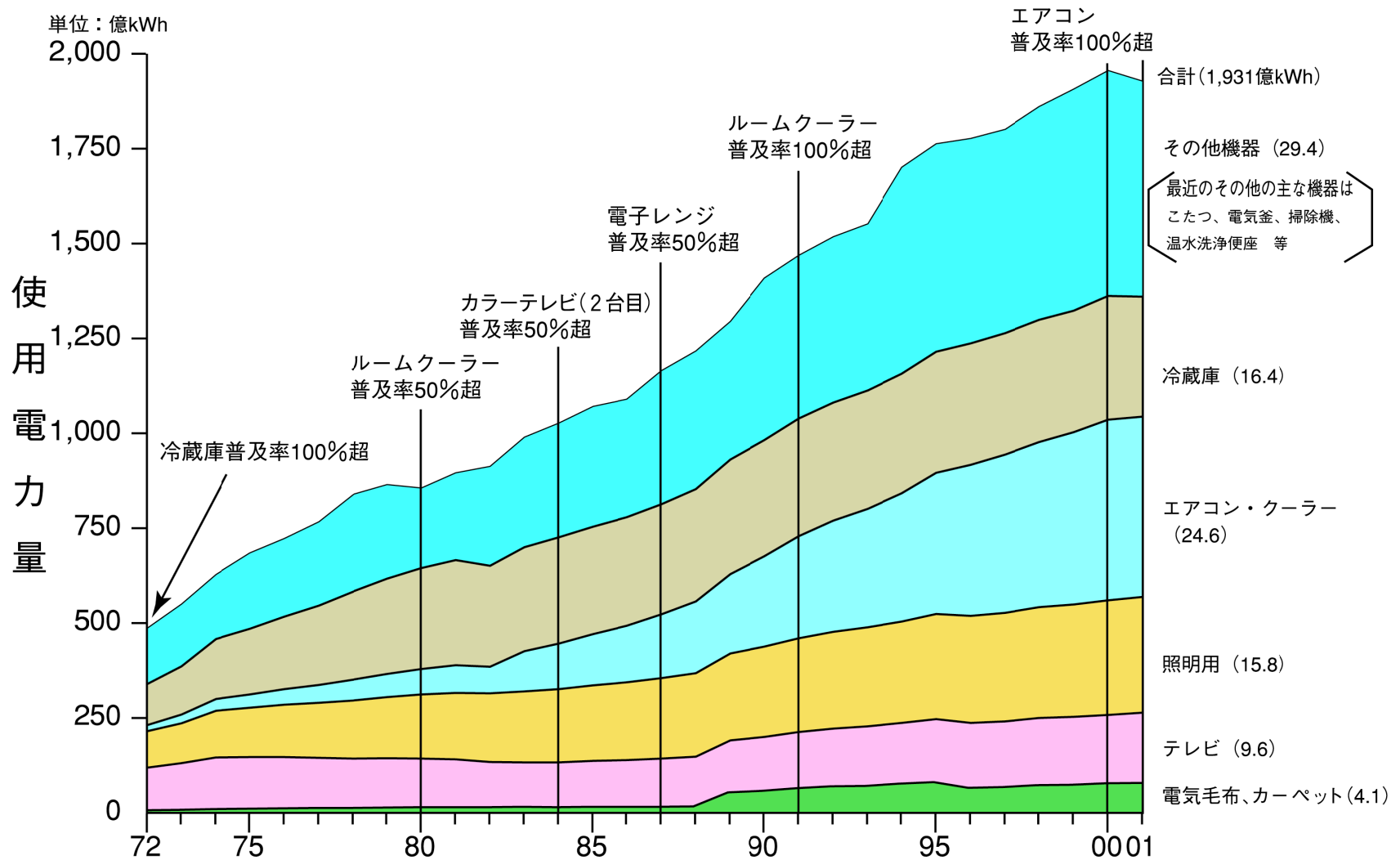
日本の一次エネルギー供給実績



高度成長は2つの津波で始まった。

- 2つの異質津波　ほぼ同時1960年(昭和35年)
石油(OIL)とコンピューター(IT)
- ソロバン、計算尺から ITチップ電脳化社会へ
- ポリ、プラスチックなど石油原料素材の進出多用。
江戸・明治からの素材、材料文明が変わった。
- 3C: Car, Cooler、Color TVは東京オリンピックから
- 超高度成長 電力需要の暴発 環境問題の発生
- 大量生産と消費社会。企業は大量生産をあおる。
- オイルショック(油断大敵) 油漬け社会の反省
- 燃料多様化(石炭。LNG)
- エネ消費効率の向上に急ぐ。日本は優等生。
- 京都議定書の発効。

家庭用電力の伸び



(注) ()内の数字は2001年度実績の構成比(%)
四捨五入の関係で合計値が合わない場合がある。

出典：電力需給の概要(2003)

油代役が新エネで可能か？

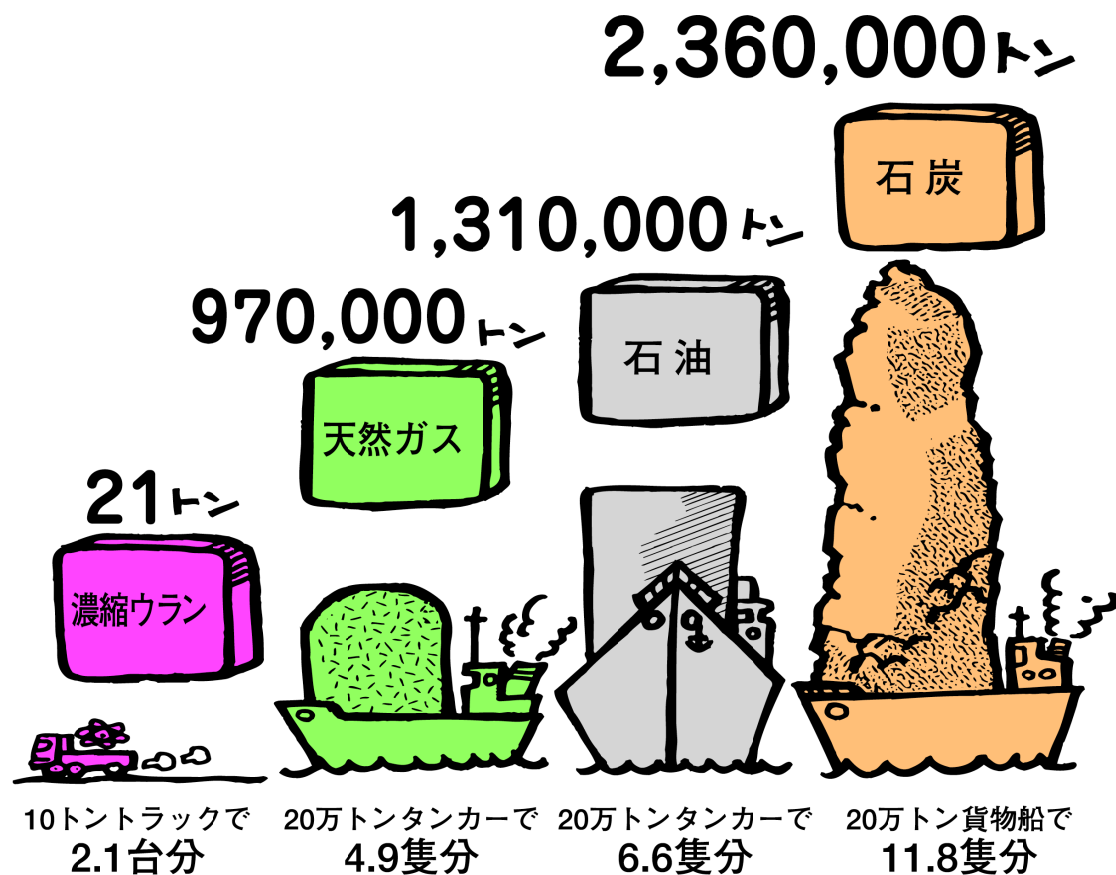
20世紀後半からのエネルギー消費は桁チガイ。
文明生活、人口増加は豊富な油の恵み。
この代役は量と質(いつも使える、装置が動く)が
大切。新エネルギーにも努力するのは結構だが、
所詮全体の数パーセントとまり。

問題は風力、太陽光も天気しだい、あなた任せ、
値段が高い。そして100万Kwを作る面積は：

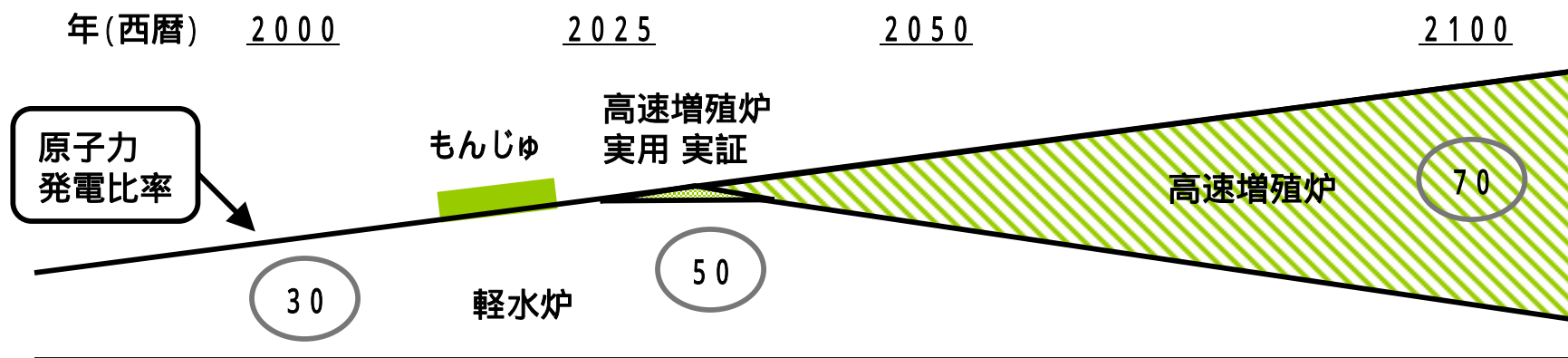
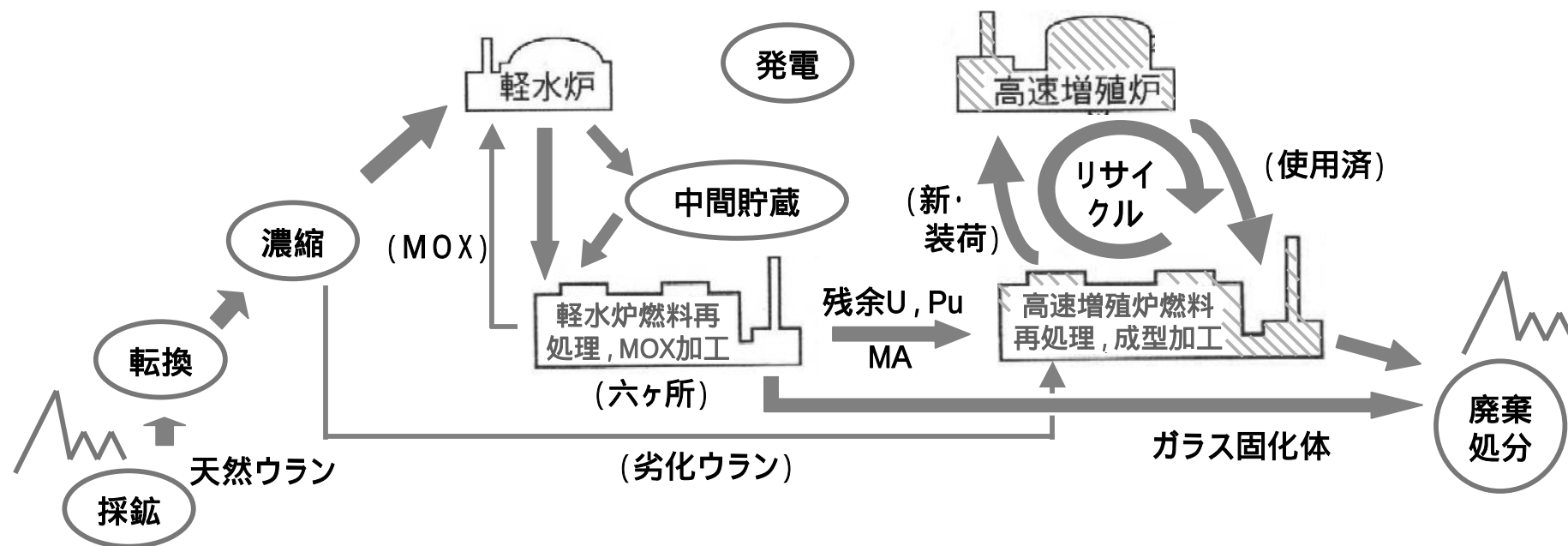
風力	約248平方キロメートル	琵琶湖の1/3
太陽光	約67平方キロメートル	山手線内側

ウランは石油の6万倍の密度

100万kWの発電所を1年間運転するために必要な燃料



核燃料サイクルはチアゲーム（連鎖）のつながり



今世紀の原子力の進展イメージ（私案T.T.）

原子力と地元 産官学連携

- ・原子力は今世紀以降も「米ビツ」 生きる糧
昔の石炭産業とは逆。 末広がりの地場発展、根を張る。
トヨタと愛知県。茨城県原子力につぐ日本中枢の位置。
- ・産官学の連携 福井県の動き大歓迎
事業者からテーマを地元の学校、研究所に積極的にだす。
検知器、診断機器などはベンチャーの苗床。
終身雇用型以外に産官学のムーバブル(移動型)雇用。
- ・産官学連携は人と産業を育てる。地元活性。
中央志向一本ヤリの時代でない。
- ・放射線利用の国民展開・地場産業化
正しい知識の地元展開。 原子力立地県は放射線理解が高い。
地場産業との連携しやすい。 原研高崎とタイアップ。